

平成二十四年（二〇二二年）六月四日 音と魂

神から人へ、人から神へ。

人の心は波動と同じく、妙なる調べに 波動を高め、心地よき音に感応するもの。  
なれば汚れし騒音や、雑音なるは、魂汚し、心狂わす元凶なり。

清き音色に心を清め、聖なる気持ちを高めるべし。

激しき騒音、雑音は、人の心を苛立たせ、つまらぬいさかい 招く元。

音は直接魂に、波動を伝えるものなれば、音楽なるには気を遣うべし。

言霊なるも同様なれば、罵倒罵声は御魂を傷つけ、生涯治らぬ傷を残さむ。

優しき言霊、声音には、心を癒す響きあり。

ことばの意味と 波動は同じ。

人を慰め、労わりて、寂しき心を包み込む、優しきことばに 温もりあらむ。

ことばの意味を重んじなば、波動は自ずと調わむ。

乱れし心を映す言葉は、言霊淀んで、御魂を荒らさむ。

耳に入りし波動は直に、御魂の記憶に刻まれむ。

なれば 音には気をつけよ。

一音一音、そのみにあらず。

音のつながり、抑揚、速さ。

御魂を狂わすことさえあらむ。

自然に近き音調ならば、御魂は乱れ、狂うことなし。

なれど自然に遠き音ほど、人の心は蝕むしばまれむ。

深夜も止やまぬ 都会の喧噪けんそう、怒号どごう怒声も絶え間なし。

流行りの音楽、歌さえも、人の心を癒なすことなし。

かえりて人の安らぎ損そこね、心の落ち着よく 抛なり所なし。

自然の声に 耳傾みけよ。

小さき音にも 神の声あり。

水のせせらぎ、風の音、鳥のさえずり、虫の声、草木のそよぎ、雨音あまねさえも、全てが愛と和の調あべなり。

御魂の奥底、神に通じる、命の始めの 音を聞きけ。

自然の中には、命の波動、宇宙の鼓動こどうが脈打うたむ。

母なる大地に抱いだかれて、満天の星と語かたらえよ。

地球の息と調和して、己の呼吸を調ととのえよ。

人の呼吸も 鼓動も 脈も、大なる自然と 相和あいわさむ。

人はその時、自らが、宇宙の一部なるを知らむ。

悠久の 時空を超えし宇宙の始めに、己の御魂の根源を見む。

音なるものを大切にせよ。

先ずは言霊ことわね、声音から、清き波動を心掛かけよ。

次に自然の音に親かしめ。人工の音に 心惑こわすことなかれ。

自然の懐ふし、神の腕かひなに、御魂を休める時を持もてよ。

命の浄化、御魂の浄化が 強く求まる時なればこそ。さにて。